

# 第四章

## ボランティア

### C · O · N · T · E · N · T · S

ボランティア精神	77
ボランティア参加者	
ボランティア総数	78
神戸動物救護センターのボランティア	78
三田動物救護センターのボランティア	79
獣医師ボランティア	80
学生ボランティア	82
ボランティアへのアンケート	
実施方法	84
ボランティア募集をいつ知ったか？	84
ボランティア募集をどのような方法で知ったか？	84
どこに参加申込みをしたか？	85
動物救護ボランティアを選んだ理由は何か？	86
ボランティアの仕事	86
〔社〕大阪市獣医師会に所属する会員が報告した 神戸動物救護センターの一日	87
ボランティア活動に参加して得たものは？	90
ボランティア参加者のことば	
初めての経験	91
参加して良かったボランティア活動	91
動物たちへの思いは同じはずなのに	92
動物たちに感謝	93
獣医師ボランティアの仕事は	94
獣医師ボランティアとして次に備える	94
獣医師ボランティアの不満	95
ボランティアの育成	96
外国人も参加した	98

## ボランティア精神

自分から進んで社会のために貢献する。連日報道される被災地の惨状を見て、「自分もこうしては行かない。辛い緊急の用向きもない。自分には行かなくては」との思いが、多くの人々をボランティア活動に駆り立てたに違いない。人、動物など対象を問わず、これまで「ボランティア」活動を通して、社会に貢献したという経験を持たない大衆が行動を起こしたと云う点で、この兵庫県南部地震でのボランティア活動は大きな特徴を持つ。後述する「動物救護活動に参加したボランティアへのアンケート調査」によれば、この救護活動に参加したボランティアの73.2%がボランティア活動の未経験者であった。

一方で、動物愛護活動のボランティア経験があり、ボランティアとしての心構えだけでなく、動物の扱いに対する多少の経験と知識を有した人々がいた（26.8%）。

負傷動物の治療、地震の恐怖、あるいは路頭に迷う飼い主への不安からくる下痢、食欲不振などの手当は、獣医師でなくては出来ぬ。被災動物を救うためには、獣医師ボランティアは不可欠であった。一般のボランティアと全く同様に、居たたまれない思いで、動物救護活動に参加した多くのボランティア獣医師がいたであろう。しかし、彼らもまたボランティア活動が未経験であった。

川崎市の開業獣医師・馬場国敏院長は、豊富なボランティア経験から、今回の自らの役割を「ボランティアを守る」ことであったと述べている。大地震の被災動物を救うためには、多くのボランティアが必要である。しかし、ボランティア活動の有経験者を多く期待するのは難しい。であるとすれば、ボランティア経験の全くない、しかしながら、意欲を持って参加した人々を守る必要があるとの思いが強かったのであろう。

このように、さまざまなボランティアが、被災動物を救うという一つの目標をもって、空前のボランティア活動を展開した。そして、このボランティアの動物救護活動は、地震によって大きな被害を受けた動物たちを救ったばかりでなく、一般ボランティアはもちろん、特に組織でのボランティア経験がない多くの獣医師に、「貴重な経験」を与えた。

## ボランティア参加者

### ボランティア総数

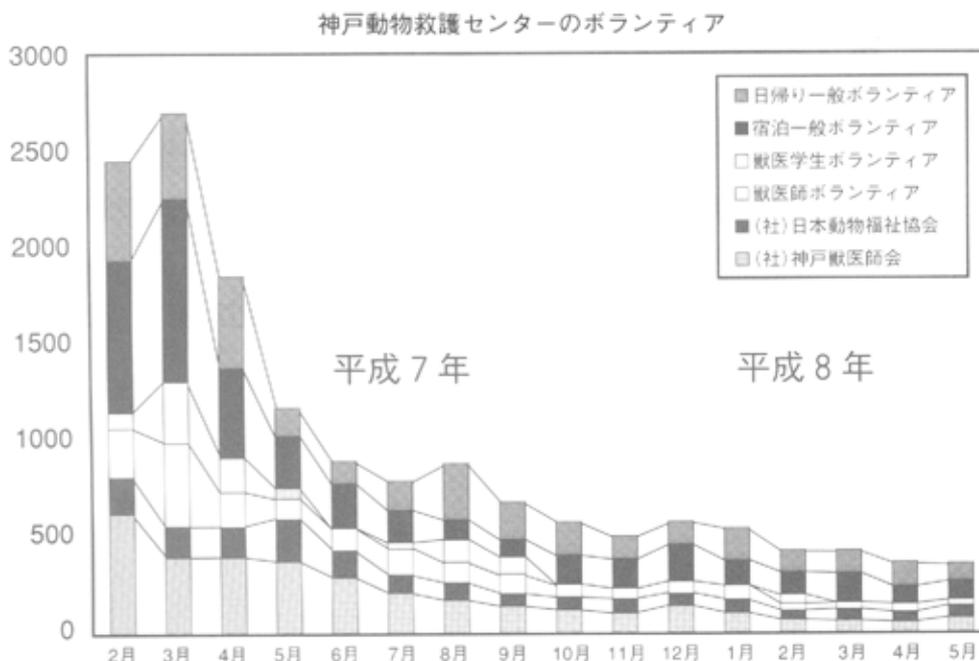
平成7年1月26日から平成8年5月29日までの約1年4ヵ月の間に、兵庫県南部地震動物救援活動に参加したボランティア総数は、延べ21,769人に達した。神戸動物救護センターで、延べ15,195人、三田動物救護センターで、延べ6,452人、伊丹動物一時保護収容所で、延べ122人であった。

	神戸動物救護センター	三田動物救護センター	伊丹動物一時保護収容所
一般ボランティア	10,283	5,660	122(獣医師含む)
獣医師ボランティア	4,912	792	
計	15,195	6,452	122

### 神戸動物救護センターのボランティア

一般と獣医師ボランティアを合わせ、15000人を超えるボランティアが神戸動物救護センターを支えた。宿泊して頑張った多くのボランティアがいた。将来、獣医師を夢見る学生ボランティアが、社会勉強も兼ねて被災動物を救った。動物愛護団体として、また兵庫県南部地震動物救援本部の構成員として、(社)日本動物福祉協会はコンスタントにボランティアを派遣した。(社)神戸市獣医師会は、まさに核となり、会の総力をあげて、ボランティア活動に加わった。

ボランティア参加者が最も多かったのは、4月4日の105名であったが、活動のピークは2月23日からの約10日間で、連日90名以上の参加者で溢れていた。神戸動物救護センター開設期間中の平均ボランティア数は、1日30.5名であった。



### 三田動物救護センターのボランティア

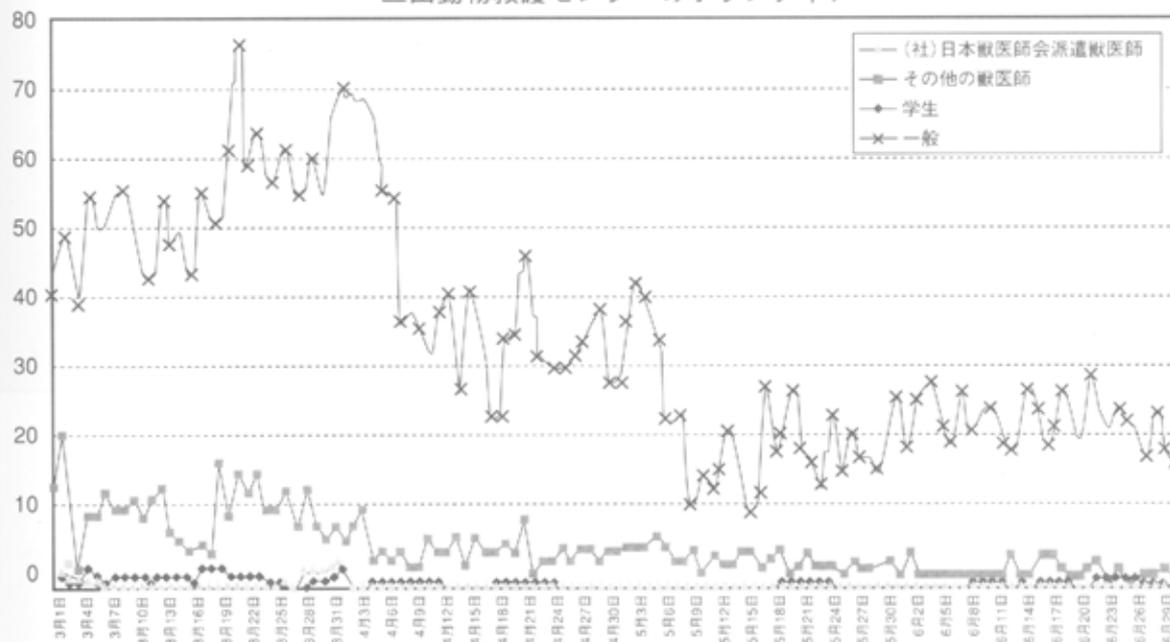
三田動物救護センターは神戸動物救護センターと異なり、野原を造成し仮設された、  
 言わば、それしかない所であった。

そこで、延べ6,500人近いボランティアが、11月30日のセンター閉鎖まで  
 活動を続けた。神戸動物救護センターより半年も前に閉鎖し、収容した被災動物も神戸動物救護センターの42.3% (460頭) であったが、しかし1日当たりのボランティアは神戸動物救護センターに匹敵する人員が動員された。ボランティア活動のピークは3月21日で、93名の参加者を得た。



一方、最も少なかったのは、9月26日の3名で、三田動物救護センター開設期間中の平均ボランティア参加者は、1日22.4名であった。

三田動物救護センターのボランティア



### 獣医師ボランティア

物言わぬ動物の健康管理は、経験と専門的な知識が必要であり、それを生業とするのが獣医師である。地震により、負傷した動物の治療にはもちろん、救護センターのような仮設の、なおかつ劣悪な飼育環境で動物を管理するには、獣医師の経験と知識が必要不可欠である。理想的には、収容動物が1頭でも居る限り、獣医師がそこにいなければならない。さらに、理想的には、数名の獣医師が専従することが望ましい。しかし、経験と知識のある獣医師は、ほとんどの場合、動物病院を営み、ボランティアとして長期間にわたって活動することは困難である。それでも、川崎市の馬場院長はじめ、神戸市内の開業獣医師など、多数の獣医師が献身的にボランティア活動に参加した。

一般のボランティアと同じような思いで駆けつけた獣医師も多く、三田動物救護センターでは、多い日には20名の獣医師ボランティアが参加した。しかし、獣医師ボランティアが全く居ない日（三田動物救護センターの6月26日）もあるなど、救護活動のなかで、獣医師ボランティアの確保が重要な課題となった。

こうしたなかで、(社)日本獣医師会、(社)大阪府獣医師会、(社)大阪市獣医師会ならびに(社)横浜市獣医師会などの地方獣医師会がスケジュールを組み、計画的に獣医師を派遣した。

ここに、(社)横浜市獣医師会が会員各位に送った資料がある。そのなかに、「II. 獣医師および人員の派遣」の項があり、獣医師ボランティア派遣の特殊性を知る良い資料となっている。



「大震災の被災動物を救うために 1月17日から9月15日まで」から

### 兵庫県南部地震動物救援活動に対する支援について

(社)横浜市獣医師会

(前略)

#### II. 獣医師および人員の派遣

現地からの情報の分析と、当会の支援可能な条件から

##### A. 送られる人材の条件

- ① 小動物の診療に精通し、多数の小動物の収容管理の経験を有する
- ② 診療のアシスタントとしての能力が高い
- ③ 一般ボランティアのリーダーとなれるような指導力を供えている
- ④ 劣悪な環境下でも体力に問題がない。
- ⑤ 個人としてある程度の団体行動に適応する能力がある。

##### B. 送り出す獣医師会側の条件

- ① 診療所で、一人で診療に当たっている開業の先生は派遣が難しいので、複数人の勤務獣医師を抱える動物病院の勤務医の先生が望ましい。
- ② 人員の派遣を間断なく派遣するために、各獣医師間あるいは動物病院間の調整を行う。
- ③ 予測しえない、人材に対する事故等に対する対応基準

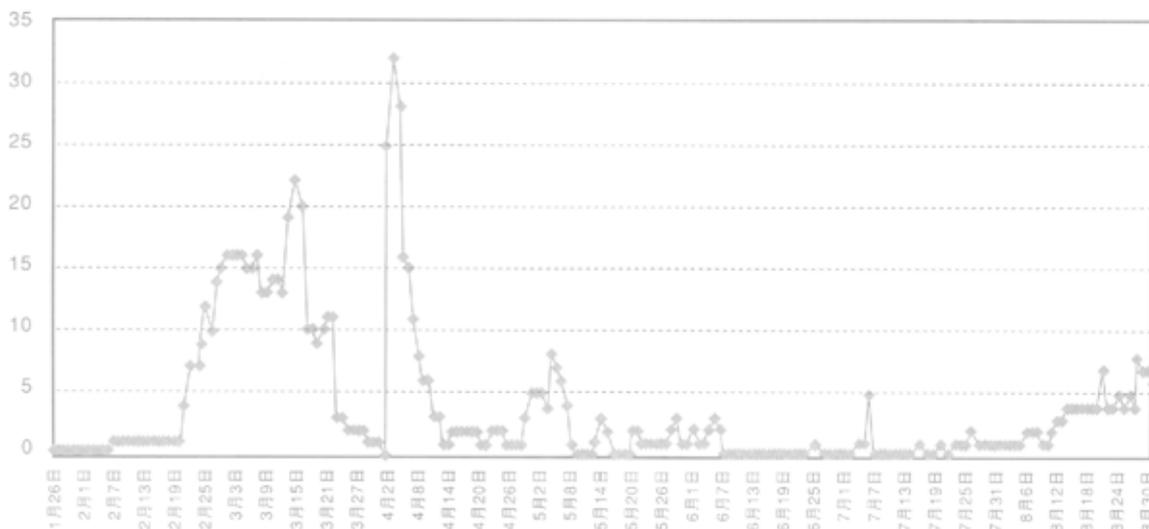
等が考慮された。そして我々は1グループ3人7日間を基本単位に、先のグループと次のグループの日程が2日ずつ重なるように獣医師を派遣し、動物救護センターの人員計画の最低数の確保に協力した。2日の重複は業務の申し送りを円滑、確実にするためだった。

### 学生ボランティア

春休み、夏休みなど長期間の休暇を持っている「学生」はボランティアとして、最も融通の効く一群である。動物救護活動を支えたボランティアとして、学生が果たした役割は極めて大きい。特に、獣医学を学び、将来獣医師を目指している学生は、本人の意気込みさえ問題なければ、大きな力になる。(社)日本獣医師会も、全国の獣医学部あるいは獣医学科を有する大学に協力依頼を行なった。

「学生ボランティア」の欠点は、学校が始まると居なくなることである。いくつかの大学では、学生ボランティアの重要性を理解し、ボランティア活動を特定科目の単位の一部として認めるなど、全面的な協力を行なった。しかし、3月下旬から4月の初めにかけて、学生ボランティアは一時激減した。この時期は卒業式の時期でもあり、また追試験あるいは再試験のシーズンでもある。その後、4月初めの1週間は、多くの学生ボランティアが友人を連れて戻り、活気ある救護活動が、新学期が始まるまで展開された。

神戸動物救護センターの獣医学生ボランティア



日 獣 発 第 181 号  
平成 7 年 2 月 20 日

私立獣医科大学協会  
構成大学獣医学科主任教授  
大阪府立大学獣医学科主任教授

各位

社団法人 日本獣医師会  
会 長 杉 山 文 男  
(阪神大震災支援対策本部長)

印

兵庫県南部地震動物救護活動支援のためのボランティア学生  
の募集について(協力依頼)

兵庫県南部地震が発生してから1カ月経過いたしました。この間、人に甚大な被害が生じたばかりでなく、大猫等の動物も負傷したり、飼育者が不明となったり、あるいは飼養できなくなってその引き取りを希望する事例等が相当数にのぼっております。

このため、(社)兵庫県獣医師会及び(社)神戸市獣医師会並びに(社)日本動物福祉協会阪神支部を構成団体として設置された「兵庫県南部地震動物救援本部」(現地本部)では、目下、それら被災動物の救護活動を積極的に展開しております(別紙参照)。

一方、この救護活動につきましては、すでに獣医師を含む多数のボランティアが取り組んでおりますが、被災動物が多頭数にのぼることから、この救護活動は、長期化することが予想されております。

このような中で、このたび、現地本部から(社)日本獣医師会(阪神大震災支援対策本部)に対してボランティア獣医師及び学生の派遣要請があったことから、本会では、今後の動物救護活動が円滑に実施されるようこれを積極的に支援するため、ボランティア獣医師及び学生等の募集及び派遣について、現地本部等との連絡、調整を行うことにいたしました。

つきましては、この動物救護活動の趣旨を十分にご理解いただきまして、貴大学におけるボランティア学生を至急、募集し、おとりまとめのうえ、別紙様式により本会までお知らせいただきたく、何分のご協力をお願い申し上げます。

なお、各大学から応募があり次第、本会で調整を行ったうえで、派遣時期、派遣人数等について大学の担当責任者にご連絡することにしております。

また、ボランティア学生の募集に当たりましては、別記に十分ご留意くださいますよう併せてお願い申し上げます。

## ボランティアへのアンケート

## 実施方法

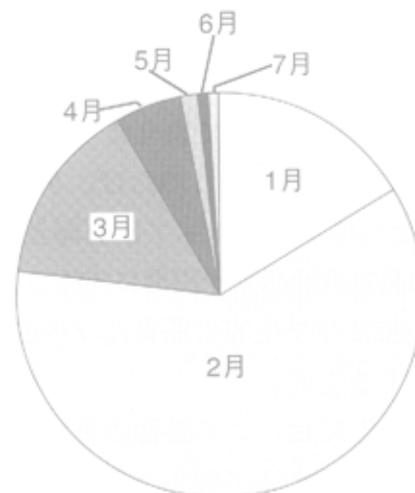
神戸および三田動物救護センターに、開設時から平成7年4月末までにボランティアとして参加し、住所が分かっていた全てのボランティア1,100名を対象に、アンケート調査がなされた。7月中旬に郵送された調査書は、8月5日までを期限として回収された。

回答数は473で、回収率は43%であった。

	宿泊	通い	不明	合計
神戸動物救護センター	133	84	13	230
三田動物救護センター	92	65	14	171
不明	27	32	12	71
合計	252	181	39	472

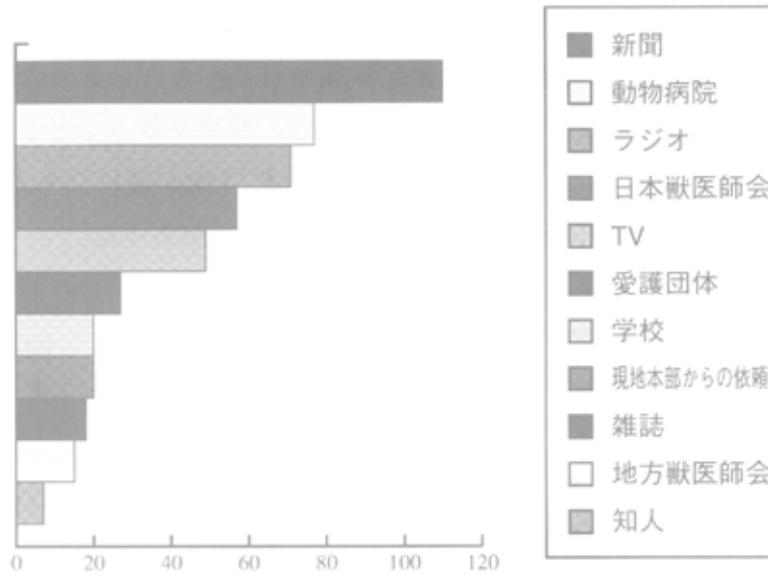
## ボランティア募集をいつ知ったか？

ボランティアに参加した4分の3以上の人々が、2月にはボランティア募集を知っていたことがわかる。しかしながら、このアンケート調査の対象者は4月末までに、いずれかの動物救護センターでボランティア活動に従事していたことから考えて、「ボランティア募集」を4月以降に知った（約3%）というのは、どういうことであろうか？おそらく、「ボランティア募集」の案内を知らずに、友人らに誘われて参加したのであろう。



## ボランティア募集をどのような方法で知ったか？

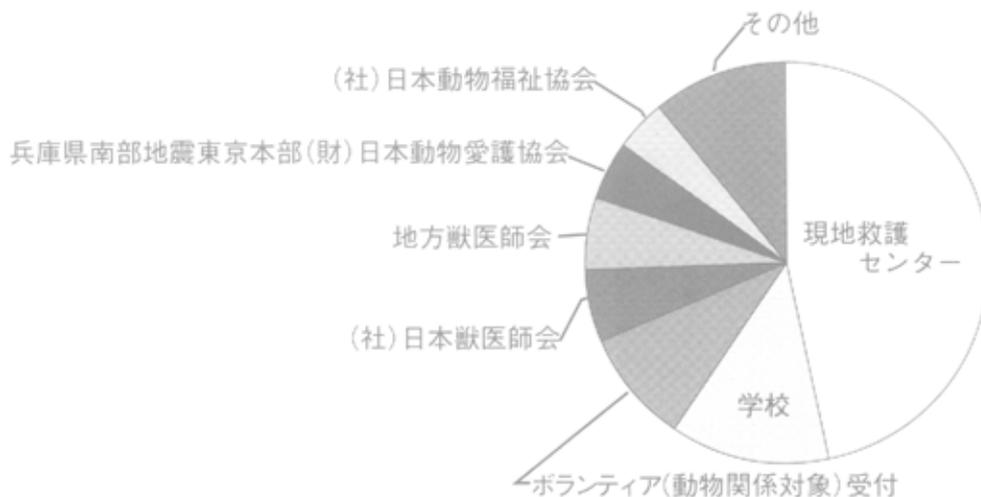
新聞、動物病院の案内、ラジオ、(社)日本獣医師会の案内、テレビなどがボランティア募集を知るメディアとなっていた。既に述べたように、(社)日本獣医師会は、獣医学生の所属する全国の大学に「ボランティア学生の募集」を案内している。



### どこに参加申込みをしたか？

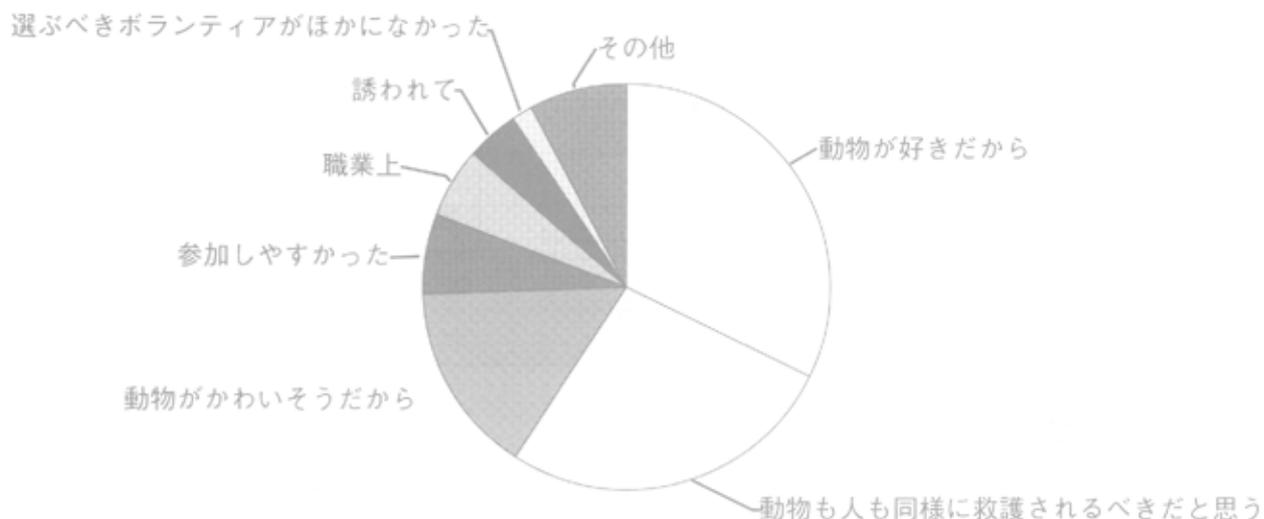
新聞などいろいろなメディアから、「ボランティア募集」を知ったあと、ほぼ過半数の人々が、現地の救護センターに直接参加申込を行っている。したがって、初期の動物救護センター、特に神戸動物救護センターはボランティア参加者の応対に追われたという。参加者も、「話し中の電話」に何度も電話をし、なかには連絡が取れずにボランティア活動への参加を断念した人もいたであろう。

こうしたことから、「その他」の回答のなかに、参加申込などの手続きをとらず、直接現地に赴いたボランティアもいた（12名）。



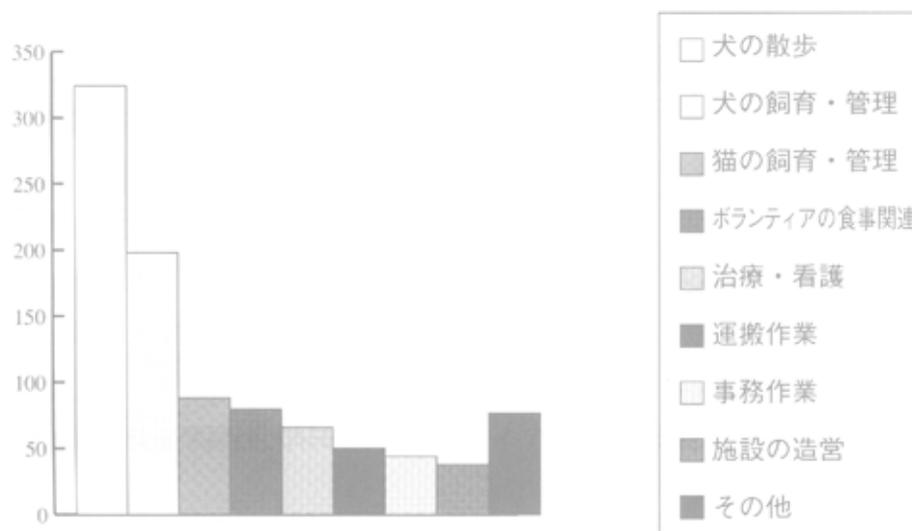
### 動物救護ボランティアを選んだ理由は何か？

「動物が好きだから」、「動物も人と同様に救護されるべきだと思った」、「動物がか  
わいそうだから」の3つが回答のほとんどを占めた。動物を救うことを目的に、参加  
したことがはっきりとわかる。「その他」のなかでは、「何か役に立ちたかった」（15  
名）、「自分自身の勉強あるいは経験のため」（6名）などがあった。



### ボランティアの仕事

動物救護活動のボランティアの仕事は、他のボランティア活動とは大きく異なり、動物の世話をすることが主体になる。「犬の散歩」、「犬の飼育・管理」、「猫の飼育・管理」などのほか、獣医師ボランティアは、「治療」などの仕事がある。「その他」の回答には、「洗濯」が18名いた。このような一般、獣医師を問わず、ボランティアの動物を救う献身的な活動が、地震で受けた動物たちの大きな不安やストレスを癒すことになった。



社大阪市獣医師会に所属する会員が報告した神戸動物救護センターの一日

現地体験報告 (2 / 13)

0 : 40 現地到着

馬場先生、井上先生 (神戸市)、玉井先生 (和歌山県)、山本、細井戸、北尾の 5 名にてディスカッションを行う。

◎現況の説明

◎今後の見直し

◎現地の他の府県の獣医師への要望

◎活動のポリシー

3 : 30 就寝 (管理センター建物内の治療室内に毛布と寝袋にて)

他にコンテナが 2 棟 (宿泊用) あり、また女性は別室の部屋にて宿泊している。

7 : 00 起床

8 : 00 朝食

9 : 00 救護部門 (保護動物の散歩、給餌)、センター部門 (電話応対、引き取り業務) のボランティア活動参加

12 : 30 昼食

13 : 30 洗濯、救援物資の搬入、倉庫の整理などの雑務手伝い

15 : 00 午後の保護動物の散歩、犬舎の清掃、給餌

18 : 00 神戸市の先生方と雑談

19 : 00 夕食及びボランティアの方や運営に携わっておられる先生方とのミーティングをオブザーバーさせてもらう

20 : 00 4 人でのミーティング (情報整理)

22 : 30 馬場先生、神戸市の先生とのディスカッション

23 : 45 センター出発

当日はボランティア獣医師 4 名 (横浜 2 名、東京 1 名、福祉協会 1 名) 参加

一般ボランティアは 15~20 名、午後は近隣の小中学生も参加

I. 本部は 2 つの部門に別れて運営されている

① 管理センター部門

a) 受付時間 10 : 00~17 : 00 (実際は 9 : 00~18 : 00 まで受け付けている)

b) 9 : 00~11 : 00 の間に約 40 件の電話あり内容は

◎ マスコミなどの取材申し込み

◎ 義援金、救助物資を送りたいという問い合わせ

- ◎ 迷い犬・猫の問い合わせ
  - ◎ 里親希望者→名簿作成・登録→後日TEL（なるべく近くの人を優先）
  - ◎ 引き取り依頼→トラブル防止のため環境の悪さを説明をし出来るだけ預からないようにしても1日10頭～20頭増えている現状
- c) 受け入れ時の書類作成（台帳と誓約書作成、預かりは1カ月単位で更新  
里親決定時の書類作成

② 救護部門

保護動物の健康管理・治療

- ◎ ワクチン未確認のものはすべて接種する（D-5、FVR-CP、RVは接続していない）
  - ◎ 重症動物は(社)神戸市獣医師会々員病院にて入院治療
- 上記の2つの部門は神戸市の会員が当番制で2名ずつのシフトを組んでいる  
（2月末までは決定、担当、市田）

※その他の業務として当番以外の神戸市の先生が

- 搬入されたフードの整理、保管
- 市内各地へのフードの分配、搬出
- 里親のきまった動物の避妊、去勢（無料）などを行っている。

※実際の運営は

- |                                   |   |            |
|-----------------------------------|---|------------|
| (社)日本動物福祉協会<br>(社)神戸市獣医師会<br>馬場先生 | } | の三者で行われている |
|-----------------------------------|---|------------|

(社)日本動物福祉協会の女性2名の協力が大きい。例えば  
電話対応→非常に上手にさばいている（未経験者では困難）  
車にて犬の引き取りに出向く（例2/13は長田区、中央区）  
などバイタリティーにあふれている

II. 一般ボランティアの活動内容

- 1) 犬舎の清掃（女性が主）
- 2) 毛布、タオルの洗濯（女性が主）
- 3) 給餌、食器洗い（女性が主）
- 4) 犬の散歩、排泄物の処理（男女）
- 5) 食事の用意とあとかたづけ（女性が主）
- 6) 施設の清掃とかたづけ（女性が主）

- 7) ゴミの焼却
- 8) 救援物資の仕分け、保管 (男女)
- 9) ムードを明るくする (女性)

### Ⅲ. ポリシーについて (馬場先生との話し合いの中で)

- 1) 今は被災地において避難生活をしておられる方たちも多く、現状で設備の整ったシェルターを作ると国民の反感をかってしまう。反感をかわないためには当面はみすぼらしい施設で人海戦術で行うのがよい。
- 2) 家族を含めたたくさんのボランティアの参加を望む。それは将来のボランティアの育成にもつながる。
- 3) 今はボランティアでもっているが今後は獣医師がなんとかしなければならない。なぜなら今まで動物は家族の一員です、大切にしましょうとやってきた獣医師の言葉が、自己の利益のためととられかねない。だから、いまこそ獣医師がイニシアチブをとり、今後活動しなければならない。この問題は神戸市、兵庫県だけの問題ではなく、日本の獣医師全員の問題として捕らえなければならない。

### Ⅳ. 我々が参加して必要性を感じた協力方法

ボランティアに参加するまでは全く分からなかったが実務的な手伝いの必要性を強く感じた。

犬の出し入れや、散歩では、きつい犬や心臓病の犬、かなり高齢の犬などがいるため、その動物の健康や一般ボランティアの安全、指導、獣医師の先生と一緒にいてくれるという安心感を提供するなど、神戸の先生と一般ボランティアの間に入って円滑な運営の手助けをする必要性を強く感じた。

開業獣医師ならだれでも出来る。時間も日帰りの1日参加でもかまわない。義務ではなく、出来ることをするだけでよい。

とにかく1日でもいいから参加してください。そしてもう一度話し合いをもちましょう。当面のシフトは我々3名で考えます。行政や他の獣医師会にたいする協力依頼などは役員の先生方をお願いします。

### Ⅴ. 三田のシェルターについて

三田の開所式が14日に行われる予定

三田においても神戸動物救護センターと同じような問題が起こり、さらに保護する動物の頭数も増え、立地条件によるボランティアの集まりにくさ、馬場先生のような

人の初動時の協力が得られないなどのことを考えると、今の神戸動物救護センター以上の問題が起こる可能性が高い。

その負担を減らすためには大阪の動物管理センターなどの協力を得て大阪にもシェルターが必要になると思われた。

そのメリットとしては

- ① ボランティア及び獣医師の出務が容易である
- ② 里親を探すのが容易。飼い主が納得しやすい（神戸→大阪）
- ③ 被災地の獣医師の負担を軽減することが出来る（被災地の獣医師は自分の生活を立て直す時間がない）
- ④ 立地的にみて第三者及び当事者の神戸の人達からも望まれていることである
- ⑤ 被災者で大阪府下に避難して来られている方が多い

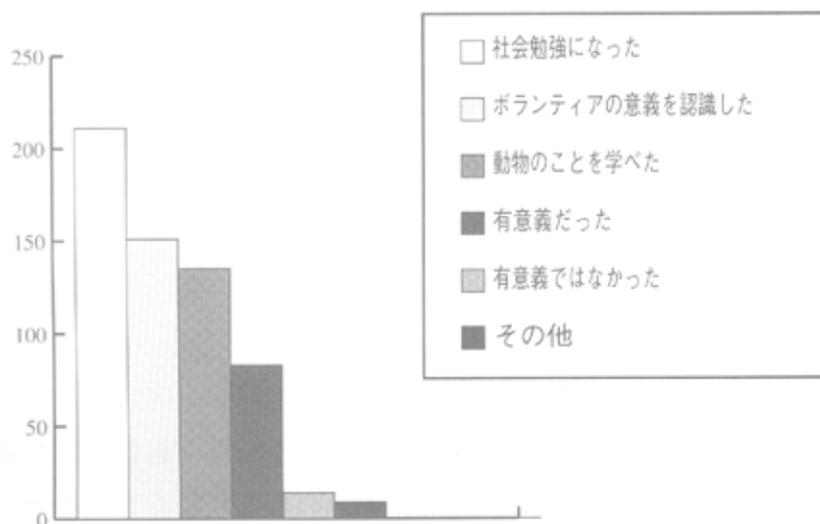
デメリットとしては

- ① 兵庫県獣医師会の実際のシェルターの運営に関する認識が不明なため十分な協議、調整が神戸市獣医師会との間で出来ていないため、反発があるかもしれない

### ボランティア活動に参加して得たものは？

「社会勉強になった」、「ボランティアの意義を認識した」など、「有意義な」ボランティア活動であったと、96%を超えるボランティア参加者が回答している。

こうした回答から推察するに、今回のボランティア活動は、被災動物を救ったばかりでなく、自らを救ったことにもなる。まさに、ボランティア元年と言ってよいかもしれない。



## ボランティア参加者のことば

### 初めての経験

正直な感想は、「たいへんだった」に尽きます。でも、私はあまり何の力にもなっていません。どちらかと言うと、自分自身にとって良い体験ができたと思います。臨床を始めて、最初の本格的な咬傷を右手に残してしまいました。

2月4日夜、決死の覚悟で車一杯の荷物を積んで神戸に向かいました。すごい渋滞のはずが、教えてもらった道が良かったのか2時間で着いてしまいました。真夜中で救護センターにも入れず、仕方なく被災地の様子を見に行きました。真っ黒に焦げ、傾いた家が軒を並べ、本当に地獄のようで、炎に焼かれた人たちを思うと胸が締めつけられるようでした。

空朝センター内に入り、たくさんの人たちが整然と作業している姿を見てただ圧倒され、馬場先生に「いまは遠くからたくさんの方が手伝いに来てくれているが、本当に必要なのは君たちのような近隣の人たちの方なんだよ、先が長いからね」と言われ、なんだか恥ずかしくなりました。

まだ1カ月も経っていないのに、センター内はきちんとしたマニュアルが出来ており、逃走感染を防ぐ工夫が随所にみられました。そして、なにより感心したのは動物の健康だけでなく心理的な面も十分考え、散歩にできるだけ時間をさいて、単親に適した性格にしていくことまで考えられていた点でした。

とにかくいろんな人に出会うことが出来たのも、今回の収穫でした。神戸の被災者もたくさん手伝いに来ていました。ボランティアの人たちの食事のために来てくれる方、散歩

のため子供たちも来てくれていました。餌や毛布に手紙が添えて毎日全国から届きます。その整理も結構たいへんな仕事でした。たった1日手伝って、帰りは車の運転が困るほどの筋肉痛になってしまいました。

次の週は子供と他のボランティアの方を連れて、泊まりがけで行きました。わずか1週間で、なかの様子はずいぶん変わっており、動物たちのストレス性下痢なども多く見られました。救護センターの生活は、決して動物たちにとってしあわせではない様に思われました。ボランティアの人々の疲れも、日増しに増しているようでした。

正直言って、私自身もこの時、犬にかまれて自分の仕事が出来なくなりそうになり、こんな事に首を突っ込まなければ良かったと考えました。

でも、神戸の人たちは、この現実から逃れられないのだなと思い、ボランティアとは、人の身になってやらなきゃいけない事を本当に実感しました。

その後も、あまりたびたび行く事はできませんでしたが、今回そのことが分かっただけでまた次にやれそうな自分が出来た気がします。

(獣医師・神戸動物救護センター)

平成7年2月4日

大石みちの

### 「参加して良かったボランティア活動」

神戸では、大変お世話になりました。

この度、ボランティアとして参加を思っていたのは、実際の話、ほんの気まぐれだった様

な気もします。春休みが退屈だったこともあるし、残り少ない大学生活を少しは有意義に過ごしたいとの思いもありました。テレビや雑誌で報道されている被害現場を野次馬的な感覚で見物に行こうとしている自分と、何かの役に立ちたいと言う自分とが交錯していましたが、結果的には、好きな犬の世話が出来、多くの人達との出会いが出来たことは大きな収穫となりました。長田区に近づくにつれ、数十日前までは、そこには確かに人間としてごく普通のあたり前の生活があったはずでした。焼け野原になっていたせいか、電信柱の数の多さだけが異常に目立ち、印象に残っています。家族同然の飼い犬をやむなく手離さざるをえなかった被災者にかわり、それ同然の世話をしあげようとする先輩がたには、圧倒されるばかりでしたが、犬好きの点では、我が家でも犬を飼っており負けるものかとの気持ちもありました。

犬に3回（ジョンに2回、その向かいの小屋に子犬に1回、エサやりの時）かまれたり、そうじの時に犬のシッコが、口に入ったこともありました。ハスキー犬のゴンが、なかなか散歩から帰ろうとせず、それならばと山を2つ越えた遠出の散歩もしたことがありましたが、つくづく飼い犬は人間がいないと、いかに無力な生き物であるかを感じ、だから飼い主は責任持って飼っていかなくてはと思いました。

1週間という短いボランティア活動でしたが、今終ってみて、自分にどれほどの事が出来、自分の中に何が残ったかは、うまく言えませんが、将来かならず、この事がどこかで生きてくると思いますし、「ボランティア

へ行こう！」と思った自分自身へも、まだまだ捨てたもののじゃないなど、確認出来たような気がします。できれば、また参加したいです。最後に、ボランティアのみなさんへ、体調に気をつけてください。それと今回充実した1週間を過ごせたことに神戸動物救護センターの方々に、感謝いたします。

「ボランティアへいっしょに行こう！」と、さそったにもかかわらず、「めんどくさそう」と断った友人へ、「ざまあみろ！」

束筆ながら、ジャンパーならびにトレーナーをお待ちしています。

日本大学理工学部 機械学科3回生

野村 健司

動物たちへの思いは同じはずなのに

地震によるストレスや病気で苦しむ犬や猫たちを前にして、どんな事に気を付けて接していったらよいか、初めは戸惑いもあったけれど、ICUで、食事の世話や掃除、薬の管理等の細かな配慮が、ボランティアの先輩たちの手でなされていた。私にそれができるか不安ではあったけれど、ケージの中の瞳を見ていると「このこたちが、早くよくなって、優しい飼い主さんの所で幸せになれるといいな」と願わずにはいられなかった。

ボランティアって“してあげるんだ”という気持ちではできない事なんだと、学ばせてもらった。自分の心との戦いの連続で、自分の中の考えの甘さや弱さ、身勝手さをつくづく実感させられることばかりで、落ち込みの連続だった。でも、自然体で、自分のできることをできるときに、できる人がやればい

い、と思うようになってからは、だいぶ仕事も見えてきて、動物たちが少しでもやすらげる時間が持てるように、心配りできるようになってきたように思う。

ボランティアから戻ってきて感じたのは、神戸から遠く関東にいと、オウム事件もあったからもあるが、神戸の情報が本当に少ないのである。地元の新聞に出ていたような身近な情報（足りない物、欲する物、してほしい事など）を、全国版で流してもらえれば、遠くにいる人も、できる事に目を向け広げていたのではないかと思う。

また、救護センターと他の市民団体と、動物たちへの気持ちは同じなのに、協力しあって事にあたるのではなく、バラバラに対応している感じが、不思議でならなかった。善意の気持ちだけでは、どうにもならないものもあるのだろう。

長期・短期の差はあるが、様々な人のいろいろな想いに触れられたボランティア経験は私にとって、素晴らしい宝物である。

枝井 美栄子

#### 「動物たちに感謝」

9月4日、我が酪農学園大学に関西学院大学聖歌隊が学校礼拝の時間に来られた。

奨励では同大学の山内一郎先生がいくら経済的に復興は出来たとは言え、人々の心から未だあの地震の爪痕は消えていない、とのお話があり、その後「いざやともに」「主はきわめ知っておられる」「Steal Away」「O What a Beautiful city」の4曲の応唱があった。

私はこれらを読んでいるうちに、自分がいた「三田動物救護センター」での日々を思い

浮かべていた。忘れもしない昨年1月17日、今まで日本を襲ったことの無い未曾有の地震が神戸を襲い、多くの尊い命が失われたのである。

震災後のマスコミを通して報じられて来る被災地の惨状とボランティアの重要性が自分を現地へと導いていた。

現地では様々な事を経験し、考える事が出来た。ヒトと動物の関係について、ボランティア同士についてなど。

そしてやはり動物も人間と同じだという事。動物は言葉が話せないのではなおさらである。当時、センターに入って来る動物たちはおそらく何らかの精神的ショックを受けていたと思われる。しかし当時のセンターの施設はまだ十分ではなく、猫は同じ飼い主のものであれば1つのケージに2、3匹入れたりしていたので、ストレスがたまり、体の抵抗力が落ちた時にFVRがまん延した。命を落としていく動物も見受けられた。三田の山奥の救護センターで命を落としていく動物を見ている時に飼い主のもとで死ねたら良かったのに、と何度も思った。

今はもう施設も無くなり、跡地の建物も全て撤去されたという。しかし、たくさんの人との出会いがあり、動物との触れあいがあり、たくさんの思い出はいつまでも僕の心の中、そしてボランティアの心の中に生きて行くことであろう。

今では全てが良き思い出である。全てのボランティア、そして動物たちに感謝している。  
(三田動物救護センター)

平成7年3月1日から

北海道酪農学園大学酪農学部酪農学科

安田 元

### 獣医師ボランティアの仕事は

2月18日より、ボランティア獣医師も保護動物の治療に当る。診療頭数は1日約40～50頭。

但し薬品類等はほとんど無いに等しい。かなりの低蛋白血症の犬に投薬はリンゲルと強肝剤、抗生剤でアミノ酸製剤やプラズマなどはない。

抗生剤もペニシリン類など少量はあるが、新しい抗生剤はない。

これらの点を神戸市の獣医師に要求しておいたが、当面の薬品は自分で持って行くことが最善の方法であろう。

神戸市獣医師会の会長の話によれば、動物薬に関しては、兵庫県南部地震動物救援東京本部よりの寄付があったとのことで、薬品会社との交渉も動物薬専門の会社（北垣薬品など）からはかなりの寄付があったが、人体薬と動物薬の両方を扱っている会社からはいい返事はなかった。

動物の病気としてはF、V、R、創傷、下痢、腎障害、膀胱炎、尿路結石等が主で、先日はバルボウイルス性腸炎が発生し、4頭の死亡があった。

夜間は犬舎、猫舎はかなり低温になる（多分0℃位）ことから傷病動物には劣悪な環境である。

一般ボランティアは主に協力的で、我々獣医師を頼りにしてくれる。又獣医師が命じたことは進んで手伝ってくれる。但し高圧的態度は慎むべきであろう。ボランティアは若い人が多いので、気が変わればすぐにでも帰ってしまうであろう。この点は神戸の獣医師も特に気を使っているところで、現在のセンター

の働きは全てこれらの若い人によって成り立っている。

当センターは1～2年間は維持したいとのことである。現在は若い、健康な動物も多いが、一時預かりの動物が帰ったり、里親にもらわれていくために出ていくと、後には老齢動物や傷病動物が残り、100～70頭になれば、神戸市内の獣医師が1～2頭引き取れば、センターは解散とのことである。

神戸市に来られる先生は、白衣、聴診器等、手なれたものを持参された方が良い。

センター内では外科手術等は現在は出来ない状態であるが、メスの刈等必要と思われる。咬傷等の緊急の手術の必要は増えてくると思う。

あれば良いと思う薬品

下痢止め（内服、散剤）

抗生剤（バルミテート、シロップ等）

蛋白製剤（アミノ酸製剤、プラズマ等）

輸血用のチトラート又は採血びん等

オブラート（又はカプセル）

スポイト（プラスチックで可）

その他にも必要と思われる薬品、器具は多くあります。

状況は日々変化していますので、私の思っている所と次回に先生方が実際に行かれた状態は変わっているかも知りません。

大阪市獣医師会・阪井敬

### 獣医師ボランティアとして次に備える

17日の早朝、突き上げるような激しい揺れと腹の底から絞り出して咆哮するライオンのうなり声にも似た地鳴りで眠りを破られた。繰り返す余震は2～3分も続いたであろうか。

テレビでは刻々神戸の惨状が報道され、大災害の実態が明らかにされてゆく。幸いわが家にはなにも被害はなかった。

獣医師会からのボランティア募集に早速応募した。派遣獣医師の数と派遣場所の連絡・調整にあたるということであった。待てども指令は一向に来なかった。災害時の救護活動をいかに早く開始するかが最重要課題であるにもかかわらずである。

JR・阪神・阪急各線は寸断されていた。そこで自転車で兎に角、出かけてみた。西宮市までは何とかたどり着けたが、そこから先は交通規制が厳しく、歩道も敷石がめくれ上がって通れたものではなかった。中国自動車道が開通して5時間かけてはじめて動物救護センターにたどりつけた。

この時すでに一か月が過ぎていた。私としては何とも遅い立ち上がりである。既に態勢は確立され、春休みが重なってたくさんのボランティアが活発に活動していた。遅ればせながら自分にできることは何かを考え、獣医師としての役割、救護動物の世話をする一般ボランティアとしての役割、それに土曜の夜の泊まり込み等に自分を生かせると思った。伝染病の予防に重点がおかれ、また環境の激変からくる下痢・嘔吐が多発した。

ある土曜日の夜の泊まり込みの時、発達した低気圧の影響で大雨と強風が吹き荒れ、なん張りもあったテントはことごとく吹き飛ばされた。とくに寄贈された大量の乾燥ドッグフードの保管用テントのすそが風にあおられて濡れてしまうのをなんとか防ごうと必死で補修して回ったことなど朝までほとんど休めない夜もあった。

大変な被害にあいながらも必死の活躍をされた神戸市ならびに兵庫県獣医師会、一日の休みもなく動物達の収容と里親探しに奔走された日本動物福祉協会の皆様に最大の敬意を表したい。横浜市獣医師会は立ち上がりが高く、途切れることなく獣医師を派遣しつづけたことも敬意を持ってここに書き加えたい。夜の海岸に立つと神戸の街明かりが見える堺市の我々が、遠隔地にもかかわらず危機意識を実際行動として実践した横浜市獣医師会のような行動が取れなかったのを痛烈に後悔している。自分たちの町に大災害が発生したとき獣医師として、獣医師会としていかに対処してゆくか。他の町での災害に対していかに初動派遣できるかを真剣に考え、準備しておかなければならない。

堺市 中津動物病院・中津 賞

#### 獣医師ボランティアの不满

今回の救護活動に参加したボランティアたちの多くから、組織の不透明さやリーダーの不在、コミュニケーションの欠如についての不満が出されていますが、その大きな原因のひとつは、この活動が組織での経験が少ない獣医師を中心として行われたことにあると思います。

私は獣医師たちの献身的な努力を批判するつもりは毛頭ありませんが、彼らは今回のような大所帯を運営するには、はなはだ力不足であり、もっと厳しい言い方をすれば、特に責任のある立場の人たちにリーダーとしての能力が欠けていました。現場の意見を汲み上げ、組織の構成員が納得するような形で方針を決め、力量のある人間に適切な仕事に

つけるようなシステムを作る能力は、個人で仕事をしている獣医師にとって習得が困難な技術であると思われ、近い将来に獣医師会に変わって大規模な動物救護活動の行える民間団体が育つ見込みのない現状では、今後行われる救護活動においてもこのような組織運営の混乱が繰り返されることのないよう指針となるマニュアル及び基本をつくっていくことが重要だと思います。

このようなことを避けるためにも、民間の動物愛護団体が早く成熟し、獣医師と共同して動物の救護にあたるだけの能力を持つようになることを強く望みます。

日本野鳥の会 鳥と緑の情報センター

神山和夫

### ボランティアの育成

1月21日兵庫県南部地震動物救援本部の発足と共に、運営に必要なボランティアの確保が目前の課題となりました。社日本動物福祉協会阪神支部も会員の多くが被災し、奉仕活動ができる人数は僅かです。それだけでなく日常的に有り余る人数で活動をしているのではないのです。少数であっても真の奉仕活動を心得た人々に支えられていることが阪神支部の強みですが、先行きを考えると不安でした。日常活動の経験と知識が多いのに役立ちましたが、同時に全く見通しの立たない未経験の部分が多すぎるのです。

1月25日川崎市開業獣医師馬場先生のボランティア参加のご意向を受けて、先生のご経験に多いに期待を持ちました。1月27日神戸動物救護センターの開所と共に早々と数名のボランティアが駆けつけて下さいました。そ

の中には以前に私が住んでいた街の方が活動を聞きつけて参加して下さった例もあり本当にうれしく感じました。彼女は、交通事情で職場に出勤できない間、黙々と働いて下さいました。日常の人様との交流の大切さを楽しみと思い返すことでした。どんなに組織が大きくても、小さな集まりでも、基本は個人の集まりなのです。

個人の信頼が団体を支えるのです。今回の活動の発足に付いても、社神戸市獣医師会と社日本動物福祉協会阪神支部とは決して良好な関係にあったとも言えない両者が、直ちに行動を開始できたのも個人的な信頼が基本になっていると思います。社神戸市獣医師会代表が旗谷先生であったことが幸いでした。以前の居住地では我が家のホームドクターとして10年間お世話になり、私がそう大胆な脱線をすることはないをご承知頂いたことでしょうし、私も旗谷先生のご誠実な仕事ぶりはよく知っていましたので、信頼できると思ったのです。また、行政機関との関わりでも、極端な言動は謹んで、節度は守ってきたつもりですので、行政機関との協力活動であっても支障は無いと考えられました。社日本動物福祉協会阪神支部の代表としてこの活動に参加できたことを感慨深く思っています。

兵庫県南部地震動物救援本部設立と同時に社日本動物福祉協会阪神支部会員が本部電話応対等のボランティアに参加しました。社日本愛玩動物協会下部組織の管理士会派遣の方々にもご協力頂きました。

この度のボランティアについては職種の多様なこと、個性的な方々の多いこと、年齢格差等難しい側面もあったのですが大過無く過

ごせたことは各人の意識が高かったのだと考えます。大災害と言う非常事態の元では人は寛大になれるのだと悟りました。各人が自己の職種に固執することなく、本当に奉仕の精神に徹していただいたことが成功の鍵のように思います。例えば、獣医師であっても診療にのみ拘ることなく、大工仕事から雑用に至るまで何の不足も口にされずに実行してくださいました。専門職に秀でた方々が雑用に甘んじてくださることは、職業人としての自信があればこそではないでしょうか。見方を変えれば、自己の職種や地位に固執されるのは、職業人としての実力が乏しく、自己主張を強くして他に認めさせようとしなければならぬのかもしれないかもしれません。

神戸動物救援センターでは、初期から獣医師とAHT（動物病院介護者）各一名を職員チーフとして採用し、新たなボランティア参加者の指導に当たって頂きました。

ボランティアのリーダー的な位置に立つ方は自然発生的に、実力のある方で落ち着いたようです。組織運営側がそれを認め、不都合が無ければリーダー的役割を公認し、可能な限り自発作業に任せることにしました。しかし、施設人所動物の判断、里親の決定、診療方針等、根幹に関わることに付いては決定権を委ねることはせず、あくまでも責任ある態度がとれるように注意を払いました。全てを任せることは一見良き信頼関係を保てることのように見えますが、責任を持つ位置にない人に責任を被せることをさせないためには、運営者は毅然としていなければならないでしょう。

少しばかりの経験者であるほど、組織の根

幹に携わりたくなるようです。その点、馬場先生は熟練者として、私たちの判断を尊重して下さりながら、実に上手く私たちをサポートしてくださいました。

このように、多数のボランティアが集まる場合、ボランティアのためのケースワーカーが必要です。若い人が多ければ、恋愛感情等の問題も生じますし、運営者が常に彼らに気配りをしている余裕はありません。

今回は、池神戸市医師会の先生方がボランティアの不満解消に対処していただき助けられました。

事業の最初から、第三者的な立場で事業展開の記録に専念する人も必要だと思いました。記録が必要なことが分かっているのに、救護活動に追われているのに先ず記録とは行きません。

今後に備えて、馬場先生のような指導者を育成する必要があります。事業の成功については経済的基盤と人材に掛かっていると思います。

1996年9月18日

日本動物福祉協会阪神支部 松田 早苗

外国人も参加した

### Kobe in Trouble

Kobe needed help after the earthquake (Hanshin Daishinsai) that killed many people. I felt Kobe was crying out for help when I watched TV the day after the earthquake. I felt tears fill my eyes when I saw the message that could be seen by helicopter that said *"PLEASE GIVE US WATER"* written in the dirt. I know they would be helped. **But what about the animals who can not cry out for help?**

Many people ran to help the people, but animals would be last on the list as far as many people were concerned. I heard at one time the government of Kobe said they would put the stray animals to sleep. I felt so angry. What can I do to help the animals I thought? I called a person in the neighborhood who is very involved with the animal groups. She introduced me to Michiko Ooishi a veterinarian also in Okayama. Michiko was going to help in Kobe and I caught a ride to Kobe with her. There were four of us, Michiko, her son Taro, my son Kenji and myself (Debbie Williams). We went around the middle of February.

We arrived in Kobe in the early morning. It was cold but people gather from all over Japan to help these animals, who couldn't cry out for help. I felt very happy that there were enough people who cared about the future of the poor animals that lost their homes. \* **For the Love of Animals they came from far away to help.** The animals were still sleeping. First there was a meeting explaining that there were about 100 dogs, 30 cats and a duck. And then the schedule of the day. There was a lot of work to be done.

Preparing meals, for people and animals

Washing blankets

Cleaning cages

Walking dogs

Organizing the boxes sent from all over Japan to help these animals

The meeting took place around the operating table which was being used as a breakfast table. After the meeting we feed the animals and I walked about 5 dogs for about 20

min each. In the afternoon Michiko Ooishi and I went with the kids to go look for a baby swimming pool for a duck. We found the baby pool, and the duck was so happy. It flapped its wings and cleaned its body very happily.

The duck might be was my son's favorite. I brought my son because I wanted him to see people helping people and people helping animals. More than just to see I wanted him to be one of the persons who were helping. I felt this would be good for him to do something for the animals. Kids were very self centered and I wanted to teach him to think of others and not just about yourself. Well, he helped a little not quite as much as I hoped. But it's a start.

On the way home for buying the baby pool. We caught one stray dog. There were many dogs and cats running around the streets after the earthquake. We brought the dog back and put it in a cage where it would have to stay for one month to see if the original owner comes forward to claim the dog. The dog looked very sad at me when we put it in the cage. But I know it was best for him, and one month later I got a telephone call, they said they have found a new owner for the dog. I was very happy, and relieved he didn't have to stay in a small cage anymore. Whole families came from all over to take home a dog or a cat as their new family member. It was very touching to watch the union, as a family picture was being taken.

The next day I helped with the cats. I wanted to see how they were being cared for. I also wanted to have a good look so I could pick one out to bring home. It was hard to decide. I took Miike. She looked very calm and she was one of the older cats (5 years old). I thought she might have trouble to find a home because she was older. In Okayama I already have one dog and one cat at that time. Miike was at the animal refuge camp for only two days, which means she stay after the earthquake it is hard to say where she was. But in the beginning she would bite just about anyone very lightly so say she didn't want to be touched. Before she was only 2 kg. she would bite, she was constantly in heat, and her fur was very unhealthy looking. It was really terrible when we tried to give an injection, she became completely wild. Gradually she became a completely different cat. She became very sweet in nature and healthy fur and her weigh is perfect or slightly heavy. She always wants to eat, I think she couldn't get much food after the earthquake for about a month till she was put in the camp. So food is so important to her. Also it is my guess that she may have stayed at an elementary

school or something where is was touched too often by children and many people so she didn't like to be touched. So the only way she could let you know was to bite lightly. **Animals can't tell us what a hard life they had, but I know she is happy now and I will take good care of her the rest of her life.**

Michiko the vet has become a very good friend of mine. **I respect her and all vets for their everyday love and help they give the animals.** And if I didn't go and help in Kobe I never would have met her. I sometimes think about that. She will stand next to me as my maid of honor this Sunday when I get remarried. I will marry a man that I met through her. If it wasn't for helping in Kobe I wouldn't have my best friend my husband and the twins I'm carrying. In my case Kobe has blessed me, and I only helped a little, and never expected anything in return. But for many Kobe and all circumstances surrounding Kobe earthquake mean sorrow and lose of love ones. So it is hard for me to tell this story because I feel a little guilty because I was very lonely but I found everything I was missing when I met Michiko.

Life goes on and we also have to think of our blessings. It is hard for some people to look back and its better not to spent too much time looking back. **But look to the future. Kobe is filled with people with the desire to work hard and more on. We must value life itself, and just to be with the ones we love.** We should never take it for granted.

People in Japan are not use to much volunteer work except maybe PTA work, which is very different in the sense. **But when Kobe needed help many people from all over the world did what they could for the people and animals in Kobe.**

I hope Japanese people start to notice **It feels good to give our time, our money and our possessions to help others and to very expect anything in return.**

Kobe has changed my life forever as it has many people. The future is not ours to see we don't know our destiny. **But let look forward to each mew day!**

**And cherish life itself be it human or an animal.**

**Debbie Williams (American 37yrs)**

**Living in Japan 17 for yaers**

**Present residence in Okayama city**

結

語

## 結 語

兵庫県南部地震に際し、このような大規模な被災動物を救う活動を誰が予想したであろうか。動物福祉行政に関わる人々は、この地震によって、直接あるいは間接的に被害を受けた動物（被災動物）を救う必要性を痛感しつつ、なお「人」を優先しなければならない立場に悩んだ。このような思いは、当初、動物救護にあたった誰もが、少なからず思い、肌身に感じていたことであろう。

しかし、地震直後から、被災動物を救うための物資ならびに人的提供が途切れなく寄せられた。この背景には、恐らく二つの重要な事柄があろう。一つは、「動物福祉」の精神であり、もう一つは動物が人間社会のなかで掛け替えのない存在になっていたということであろう。

家族を失い、家を失い、生きる希望さえ失った人、あるいは震災により心に大きな傷を負った人々が、動物がいたから生きられたと語る人、動物を生かすために生きる力を得た人、また不安な毎日を送っている多くの人々が、動物と一緒に暮らすことにより、何とか心の安らぎを得ようとしたこと。神戸動物救護センターで保護収容し、里親に引き取られた動物の実に69%が被災地である神戸市を始め兵庫県下で暮らしている事実、地震前まではそれほど気にもかけていなかった犬や猫を急にかわいがりだしたり、新たに動物を飼育しだした人が増えたという事実、さらには動物病院を訪ねる人と動物が増加したという事実は、大震災のなか、動物は掛け替えのない家族の一員として、人と共に逃げ惑い、避難し、生きていたということであろう。この大震災は、コンパニオンアニマル、伴侶動物という言葉が盛んに使われるなかで、確実に日本における動物の地位向上が認められたと同時に、人間がこの地震により心に大きな傷を負い、不安定な生活を送っているなかで、目に見えない精神的な痛手を無意識のうちに動物を愛しむことにより癒そうとした行動、あるいは無心な動物と接することにより知らず知らずのうちに心の安定を得ようとした行動が浮き彫りにされたといえる。

こうしたことがまさに正しいとすれば、今後ますます「人と動物」の関係は重要になり、獣医事に関わる人々の責任が大きくなることになる。そして、人々が来るべき災害に備え、災害防止に知恵を絞っているように、動物の側に立つ人々は、「災害時の動物救護」を真剣に考えねばならない。